



Title	「同罪者たち」初稿に見られる若きゲーテの精神
Author(s)	対馬, 晃; TSUSHIMA, Akira
Citation	独語独文学科研究年報, 13, 1-16
Issue Date	1987-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/25740
Type	departmental bulletin paper
File Information	13_P1-16.pdf



「同罪者たち」初稿に見られる若きゲーテの精神

対馬 晃

I. なぜ「同罪者たち」初稿を問題にするのか。⁽¹⁾

ゲーテは「同罪者たち」初稿を1768年11月に書き始め1769年2月に完成させている。この期間は第二次フランクフルト時代にあたる。故郷のフランクフルトで、初稿完成前の12月には死の瀬戸際まで行く程に病が重くなっている。

病気はライプチヒで得た。ライプチヒでは、フランクフルトの親元が裕福だったおかげで物質的側面で生活に困るということはなかったものの現実に対する幻滅感にさいなまれていた。⁽²⁾これが病を得る遠因であった。もっとも彼は現実の世界に避難所をつくって自己救済を計っていたことはいた。つまりその避難所のうち最も重要なのは、友人のペーリッシュ、恋人ケートヒェン、文学の創作であったのである。しかし文学的名声が得られず、二人を失ったとき、すなわち三つの避難所が全てその役割を果たさなくなったとき、彼は大きな精神的ダメージを受けたのであった。これも病気に罹るひとつの要因となった。そして無理な生活である。こうしてゲーテは病気となり肉体的危機に陥るわけだが、それは精神的危機をも伴うものであった。見方によっては、肉体的危機によって精神的破局を回避したとも言える経過であった。⁽³⁾

ライプチヒ大学においてさしたる成果もあげることなく、ゲーテは精神的肉体的に打撃を受けて故郷に帰った。故郷にあって挫折から回復していない時期に書かれた作品が「同罪者たち」初稿である。この中には若き挫折した天才の苦悩する姿が認められる。そして初稿には1769年6月から9月にかけて書かれた三幕からなる第二稿⁽⁴⁾に比べて、よりあいまいなところがある。しかしながら初稿のそのあいまいさは、逆説的ではあるが、危機にある精神をよりはっきりとわれわれに示してくれるのである。なぜ初稿を問題にするのか。それは危機の時代を生きぬいていかななくてはならない現代人にとって、必要不可欠な精神の原型がそこに認められるからである。

II. 劇中の人物たちの思いの考察

II. 1. かつてゾフィーはアルツェストを捨てたという⁽⁵⁾。なぜそうしたのか。

作品中にゾフィーの母親は登場しない。死んで、もはやこの世にはいないと考えられる。母が死ん

だこと、及びそれに伴って引き起こされた事態を115行で使われている Noth という語が表わしているとすれば、この Noth 「苦境」にある彼女にとっては、精神的動揺を鎮めてくれる人の存在は不可欠であろう。従ってそういう慰め、励ますことで動揺を鎮めてくれるはずだったアルツェストを捨てることは、できないことだろう。このことはゼラーとの不幸な結婚生活を嘆くゾフィーをアルツェストが慰めている第四場を読むことで裏づけをとることができる。つまりゾフィー129行と130行において「あなたに対してだけ感じたこの心は / あなたの手以外の慰めは知りませんわ」と言っているがこういう思いは別れる前も同様であったと考えられるからである。

次に苦境は、母の死とアルツェストのゾフィーへの求婚という二つの事件から引き起こされたと仮定してみよう。その場合には、肉親がそばにいない宿屋の主人としてひとり取り残されることになる父親の反対があることだろう。というのも結婚すればゾフィーはアルツェストの住む土地へ移ってしまうことになるだろうからである。ゾフィーが去ってってしまうということは宿の主人である父親が後継者としての娘を失うことでもある。この場合、父親の反対とアルツェストの吸引力の間であって、ゾフィーは最初に仮定した別れの直前に母の死があった場合以上に苦しむことになるだろう。つまりアルツェストがゼラーのように婿入りすることは、きわめて難しいだろうし、299行の「これが恩義に報いる愛情か」という泥棒の嫌疑をかけられ怒って言われたセリフからもわかるように父親は、当然自分がかけてやった愛は報われるべきだという考えを持っていて、娘が自分を見捨てて遠くの土地へ行くことになる結婚を許可するはずもないからである。

さて第一の仮定においては、アルツェストを捨てる理由は見出されない。第二の仮定においては、第一の仮定にはないアルツェストの求婚がつけ加えられた。それによってゾフィーは父の家を出ていくか止まるかの選択の前に立たされることとなった。彼女は結局、父の権威に屈して、アルツェストとの結婚をあきらめ、結果的に彼を捨てることになる。どうやら第二の仮定は、アルツェストを捨てた理由を提供してくれそうである。

ここで第三の仮定を提出してみたい。それは、アルツェストが求婚したために、ゾフィーが苦境に陥ったというものである。この苦境とはどのようなものであろうか。まず父が結婚を許可するかどうかの問題となる。第二の仮定に比べて妻の死によるショックが想定されない分だけ、感情面での結婚に対する反対は強くないだろう。いずれにせよゾフィーにとっては、アルツェストか父親かという葛藤は存在することは存在する。これは主にアルツェストの意向と父親のそれとを問題として生ずるものである。それに対してゾフィーの内面から湧きあがってくる問題が存在する。もちろん外から入ってきた問題によってその内面問題が明確になったのだが。すなわち Identität 「自己同一性」「自己の存在証明の根底」にかかわる問題である。彼女にとって父のもとを離れるということは、それまでの生活様式の大きな変革を要求されることを意味するだろう。そしてそれは自己の存在証明の根底の動揺を意味するだろうし、また生きるために自分の古い根を掘げに掘げ新しい環境に適応させなくては

ならなくなることを意味するだろう。これは前述の葛藤を上まわる大問題である。この大問題を意識させられたとき、ゾフィーは恐れ、アルツェストに心を残しつつも、彼を捨てる方向へとその心は急旋回していったと想定することができる。

ところで第三の仮定において取り上げた「自己の存在証明の根底」の問題は、ゾフィーが家を離れて行かなくてはならないという状況ではかならず彼女の思考の前面に出てくるとされる問題である。もしこうした問題が前面に出てこず、それにもかかわらずゾフィーが苦境(Noth。現代表記ではNot)に陥ったのだとすると、それはどんな場合であろうか。おそらくそれは互いに愛し合っているにもかかわらず、アルツェストの方では結婚の意志がなく、そのことをゾフィーが知ってしまった場合であろう。ここで二人が愛しあっていたことはテキストの65行、66行、70行「彼がはじめて燃えたさせたこの心/彼によって愛とは何なのか、はじめて感じたこの心」「どんなにわたしをアルツェストは愛していたんでしょう」において確認することができるから、この第四の仮定は突拍子もない感じはしないことだろう。この仮定においては、一方のゾフィーの場合、結婚と恋愛の成就とが結びついていて、他方のアルツェストの場合それらが直結しておらず、恋愛の情熱と結婚が互いに独立的に存在している。そこではゾフィーは、結婚の望みがないまま情婦としてアルツェストと結びついていくのかそれとも市民階級の一員としての誇りを貫くかの二者択一の苦しい選択の前に立たされることになるだろう。第十三場でアルツェストに、金を盗んだのではないかと思われ憐れまれ、あてこすりをされたとき、怒って態度を硬化させそっぽを向き、自分から離れるよう命じたことを考えると、どうやらそういう選択の前に立たされたときには、確実に後者の誇りを貫く方を選ぶことだろう。

アルツェストを捨てた理由は従って、これまでのところ三つ想定されたことになる。ひとつは母親の死とアルツェストの求婚という二つの事態が発生して、父親の権威に従うかアルツェストとの愛に生きて結婚に踏み切るかという選択を迫られたとき父親の権威の持つ力がアルツェストへの恋の情熱の力に打ち勝ってしまったという理由である。もうひとつは求婚され存在の根底に触れる問題が浮かびあがり、それが中心の問題となったとき、これまでの存在を保守するのか革新するのかを問われ、安定を求める志向が勝ちを占め保守を選んでしまったという理由である。そして最後のひとつはアルツェストとの恋愛観、結婚観の違いを克服することはできないと知り、彼との結婚を断念したという理由である。

ところで71行目においてゾフィーは「運命がわたしたちをまもなく離れ離れにした」と言っている。一方アルツェストは188行目において「最後に彼女はわたしを捨てた。わたしは運命を呪った」と言っている。「運命」というからには、人間の力ではいかんともしがたい状況が生じたのであろう。少なくとも二人はそう考えていることになるだろう。二人の内面よりは外の状況の強制の方が優勢になって、つまりそれが二人の内面に運命として働いたと考えると、第一の理由である父親の権威が二人に別れを強制したというのが理由として適当のように思われる。しかし、二人がそれぞれの身分を離

ることができないということを「運命」と考えると第二の理由を不適當であるとして退けることはできない。更にゾフィーに対して「結婚」が避けることを許さぬ強制となっていたとすると、第三の理由も不適當であるとして退けることはできない。つまり捨てた理由を特定する決定的な証拠はテキスト中には見いだすことができないのである。すなわち、どの理由も考えられうるということである。

Ⅱ. 2. 昔、アルツェストを捨て、そして再会した今、ゾフィーの心理構造はどうなったのであろうか。

まずひとつの問いをたててみたい。夫のゼラーのことを「けだもののような人」(72行)「あの人は悪魔よ」(93行)「善良な心を持たない愚かもので理性のない悪い人」(118行)と言い、「あの人と一緒に生活するなんて！それがどれほどわたしを悲しませたことか、考えてみて」(123行)とアルツェストに訴えているように、彼女は夫には不満だらけである。それならば、なぜ別れてしまわないのだろうか。

この問いは次の問いを内に含んでいる。つまりなぜ彼女はかつて愛しそして今も愛しているアルツェストの泊っている部屋へ真夜中忍んでいくのに、結局のところ、彼を「わたしのお友達」(133行)と呼んで、身を任せることはせずもたせかけ一応貞淑な妻たることを要求する市民道徳の中へ帰っていくのかという問いである。この問いに答を与えることができれば、おのずと前者は明らかになるだろう。そしてこれらの問いは、ゾフィーの心理構造を明らかにすることによって答えが得られることだろう。

ゾフィーにとって非難すべき相手とはいえ、ゼラーはやはり最終的には彼女の意志で選んだ夫である。もし姦通したら自ら進んで果たそうと決意した妻としての貞節の義務を放棄することになる。そうすると、それまで失わず維持することのできた自尊心を失ってしまうだろう。アルツェストと別れて後ゼラーと結婚し維持してきた市民としての生活を失ってしまうことだろう。あるいは市民道徳を維持しようという意志を放棄してしまうことになるだろう。姦通こそしなかったもののアルツェストの部屋へゾフィーは入っていった。誘惑されたいという心が残っていることの証拠である。

それでは、こうした心を宿しているゾフィーの心理構造はどんなものだったのだろうか。アルツェストと別れゼラーと結婚 — 夫に不満な毎日の生活 — ここで形成された彼女の思いを分析してみよう。ゾフィーの思いは次のようなものだろう。市民道徳を逸脱した生活をしてはいけない。もし夫が愛することのできる人だったら、アルツェストへの思いは消えていくだろう。しかるに今の夫を愛することはできそうにない。だからアルツェストに憧れる気持は消えないで残っている⁽⁶⁾、というものである。ここでは本来、夫に向かうべき愛が現実には彼女のそばにいないかつての恋人アルツェストに向けられている。つまり彼女の心の中にはアルツェストという救い主の像ができていると考えられる。しかしこの像は実は彼女自身の、彼女だけの中にあるのだから、外のしかるべき対象に向けられ、その対象からも愛を向けられるというのとは違って、愛は常に内向きになりがちである。夫へ向かうべき愛を断たれているこの状態は精神の均衡にとって良くなく、自分是不幸だという思いを強くさせる。だから市民としての生活を無難にこなしているということを得ている満足感によって、彼女はかろう

じて精神のバランスを維持していると考えられる。そんなとき、本物のアルツェストが目の前に現われたのである。今までの精神のきわどい均衡の構造は、当然動揺することになる。バランス構造の保持は難しくなる。

第三場でゾフィーはアルツェストの部屋へ行き、第四場でアルツェストに出会う。第三場の87行、88行において彼女は独白をしている。「あんたはやさしすぎるのよ。あんたの犯した罪っていったい何。 / 貞節を約束したと言うの。それに約束ができたとしても。」「あんた」と自分の心に向かって言っているこのセリフは前述の均衡構造の動揺変化を表わしているわけであるが、第四場のアルツェストとの会話の中で、その構造は新しい要素をつけ加えていく。改めて心理の変化を追っていくと、夫が出かけていないため市民道徳の規制が弱まりアルツェストの部屋へ入っていく。しかし夫に貞節をつくしているという誇りは、彼女の生きるバネになっているので、アルツェストにもたれかかり両腕に抱かれても、誘惑に負けて身を任せることは思いとどまる。そして目の前にいるアルツェストを、愛は親密さだと規定して愛する友人とみなす。エロスないしは性をアルツェストとの関係では排除するのである。実際にアルツェストと二人きりになる前までは、アルツェストへの思いという場合、それは姦通願望を含んでいた。だから市民道徳との葛藤も小さなものではなかった。今は、二人きりで会った今は、アルツェストを友人と規定し、彼への愛情を性とは縁のない友情と言い含めることで市民道徳に対する倫理的葛藤を弱めることに成功するのである。こうした新しい構造はゾフィーには望ましいものである。こうして彼女はゼラーと別れることを回避し、新しい、より安定した心理の均衡構造を獲得するのである。

Ⅱ. 3. ゼラーがゾフィーに間男されたら最後まで思い込んでいるのはどうしてか。

第五場。ゼラーは、部屋を出ていったアルツェストとゾフィーが低い声で話しあっているのに気づく。彼は自分は寝取られ男になってしまったのだと思い込む。しかしながら第四場でゾフィーはアルツェストを友達と呼んで姦通を回避しているのである。ゼラーは一人合点をしている。なぜ女房を信じないのか。第十一場でも寝取られたと言っている。第十四場でもアルツェストに「わたしはこのような妻を得ることを予定され、 / しかも、おふくろのおなかの中でもう寝取られ男の角をつけられていたのでございますよ。」(563行、564行)と奥歯にもものはさまったような言い方をしている。アルツェストはそれに対して直ちに積極的に自己弁護をするということをしていない。なぜならゾフィーを誘惑しようという気持は確かにあったのだから。

確かにゼラーは第十五場でゾフィーの貞節の美德を信ずると言っているのに、最終行の632行で間男されて吊るされるんじゃ、ひどすぎるでしょうよ、と言っている。このセリフを吐いたゼラーの心理は何に、いったい起因するのであろうか。それは第三場、第四場において、ゾフィーの独白を盗み聞きし、彼女が自分を愛していないのだということをはっきり知ったからである。しかも彼は継母

(13行)に育てられ愛に飢えていた。頼みの綱であるゾフィーにも愛されていないと知って、心に生じた空虚感、喪失感が問男されたのだという被害者意識を確たるものとしたのである。

Ⅱ. 4. ゼラーはなぜ盗みをしたのか。

第二稿であればこの問いに対する答えは全く簡単である。そして明らかである。借金の返済を迫られてやむをえず盗んだのだということになる。しかし初稿にはそういう記述はない。

さて彼が、家を空け、女房のことも義父の相棒として宿の経営に携わることも顧みないのはなぜか考えてみよう。その理由は以下のように考えられる。結婚した当初からゾフィーの心が自分以外の男に向けられているということを感じていたこと。第一場で告白しているように、何でも欲しいしやってみたいのに全てを持っているわけでも全てができるわけでもないのが彼の状況だということ。そういう彼にとっては現在所有しているものに対してよりは、所有していないものの方が関心事となっているのである。従って彼の目は外へと向けられることになる。そのため義父の望む生活態度とはかけ離れていくことになる。義父の小言は彼を増々家から離れさせるし、義父のけちさ加減がゼラーの第十四場のセリフを言わせる一因ともなっている。そこでは次のように言われている。「彼は自分のものをたいせつにたくわえておく。だからわたしは家の外で飲むんですよ。」(550行)ゼラーは家に腰を落ち着ける気持になれない。盗みの才能のおかげで日々、汗して働かずとも金を獲得できる者がいるのに、地道に生きていくのは馬鹿らしいと思っている。以上のことが家・女房・義父を顧みず歩く理由としてあげられよう。

ところでゼラーが女房にも義父にも愛されていないという困難な状況を打開するためには二つの策が考えられる。ひとつは、彼らに強い愛情を持って接することであり家業に精出して、遊びのためはでに外へくり出すことをしないこと、要するに市民的美德を持つことである。もうひとつは、親の愛を失ったと思ひ込んだ子供がとる策と類似している。つまり関心を自分に向けるため、わざと親の困ることをするという策である。これによって子供は関心を買うことには成功するもの自分は悪いことをしたと思う。そう思っているから親に処罰されることを願う。処罰されることで快感を得る。こうして自虐の性格を形成する。そして親の愛を失ったと思ひ込むことによって生じた心のアンバランスを均衡状態にするのである。この第二の解決策に示される方向をゼラーはとったのだとも考えられるだろう。そしてこの第二の策には、結局自分は見棄てられるはずはないのだという甘えがある。子供の場合は親に対する甘え、ゼラーの場合は義父と妻に対する甘えである。つまりゼラーの盗みは、愛への「渇き」(17行)と甘えから行なわれたと推測されるだろう。

Ⅱ. 5. 宿のおやじが政治に関心を持つ理由とは何なのだろうか。

宿のおやじは第八場でアルツェストに向かって言う。もし窃盗事件が露見したら町の彼を妬む者たちは、彼に盗みの責任を負わせるだろうと。宿の主人は事件を内々に処理してしまおうとしているのだ。第七場で彼の口から語られる安くて安全という宿の信用の維持が彼にとっては至上命令なのだ。信用をなくし商売が続けられないようなはめになったら、もう政治情報どころではないだろう。だから犯人の名を教えてくれたら事はなかったことにしようというアルツェストの提案に安心させられる。それで、事件の発生のため後景に退いた情報、それも手紙によってアルツェストにもたらされたと思われる情報に対する飢えが再び彼を支配することになる。ここから宿屋の主人の政治情報をはじめとする情報一般への並々ならぬ関心は生活基盤の安定の上に存するものだというを確認することができる。おやじは自分の宿にいろんな人を泊める。彼は居ながらにして、他の者たちに比べたら多くの人間観察のチャンスを与えられていると言えよう。住む町に縛られていながら他国人をも、関係範囲に含めることができるという点で彼の関心は町をはるかに越えている。彼にもたらされる新しい知識は、彼にその体系化を強いることだろう。ただ雑然と頭に詰まっているだけでは知識の消化不良が生じ不安な状態を主人にもたらすだろうからである。身分制度が崩れ出した社会に生きていて、さまざまな事件を見聞きし体験し、一度政治の世界に目を開かれたものにとって、体系的な知識をもって自分の意見をつくり政治に介入したいと思うのはごく自然のことであろう。宿のおやじの場合もそうであろうと推測される。

しかし当時政治の実権を握っていたのは都市貴族であり宮廷人であった。自分が住む社会の動きの中に、自分の政治的発言による直接の影響を確認するなら、彼の欲求の二つは充足されることになる。つまり政治参加の欲求と、政治参加による成果獲得の欲求である。主人は、かかる欲求満足を阻害されている。彼の満たされない思いの吐け口として、せめても政治情報を得ることだけは確保したいという欲求は十分うなずける。

確保することによって、実際に政治の動きに対して目に見えるような影響力を及ぼすことができなくても、手に入れた情報をもとに政治の動向を掴み未来を予想し適中させることができ、知を増大させることができ、時代とともに生きているという実感を持つことができるということは、前記の二欲求を満たされることはない者にとって、大いなる不満の解消につながるだろう。もちろん本来の欲求はそれで完全に満たされはしない。

だから第二場ででの主人の独白に見い出すことのできる新しい正確な情報を早く欲しがめる気持は、本来の欲求の完全な充足を得られないが故の不満足感を反映したものといえるだろう。すなわち宿の主人は少なくとも情報の蒐集という点では完全でありたいという強迫観念に駆られることになるのだ。こういう視点をとると、主人が情報のためには、娘を泥棒と誤って暴露してしまうというのも、よく理解できるだろう。

Ⅱ. 6. 4人の登場人物それぞれの怒りはいかにして一応納まったのか。

宿のおやじは窃盗事件のために、アルツェストの誘導に引っかかって、自分が犯人だと思い込んでいる娘の名を言わされるはめになってしまう。それとの交換で掴まされたのは彼にとっては無価値な手紙だった。本来の欲求を断念して代わりに作動させた激しい政治情報蒐集欲求を玩ばれ、いわば娘を売ってしまったような形になってしまったおやじはひどく腹を立てていすをひっぱたいた。ここに見られる怒りは自分に対する怒りでもあり、アルツェストに対する怒りでもある。しかしアルツェストに対する怒りは単にアルツェスト個人に向けられたものとしては不十分であろう。貴族階級に属する人としてのアルツェストと市民階級としてのおやじとを対立させて考えることが必要だろう。

宿の主人の思いは次のようなものであろう。政治権力を行使できる貴族の奴がわしから情報蒐集という代用満足すら奪った。主人はいすを棒で叩き、ゼラーに怒りをぶつけても、その気持を納めることが難しい。疲れてやっと納めるのだ。

アルツェストは友情、愛、美徳を信じていない(第六場)のに、その属性と思われることをしてしまふ。つまりゾフィーと苦痛を分かち合い、ゾフィーの愛を喜び、自分もゾフィーに愛を告白し、彼女に対する尊敬心を持つ。またゾフィーを誘惑してやろうという悪意を失なうのである。彼女の美しさが懐疑を弱め、悪意を後退させてしまうのである。この美=ゾフィー=性的魅力にあふれた女性を自分のものにできないのが彼には不満である。怒りを彼女に直接向けることはきわめて難しい。くすぶる不満が激しい怒りに変わるのは、ゼラーに密かにゾフィーに会ったことを揶揄されたときである。ゼラーをどやしつけ盗みの真犯人を知ることによって一応の平静を得る。

しかし支配階級として、被支配階級の娘に、結局のところ対さざるをえない彼は、娘が被支配階級に要求されている道徳に忠実であるために娘を自分のものにするができない。怒りを含んだ不満は彼から消えないだろう。というのも、ゾフィーとの問題で愛と愛の成就と社会の体制との間の互いに相入れない関係を体験させられ、一個人にはどうにもならないことを思い知らされたからである。

ゾフィーは父とアルツェストに犯人と思われていると知って怒る。それは、怒りの言葉を直接彼らに放つことと泣くことによって「一応」収まる。

ゼラーの怒りについてはどうだろう。第三場でのゾフィーへのゼラーの怒りはアルツェストの出現のため発散を抑えられる。第四場に至っても抑えた怒りを処理するチャンスはない。第五場でアルコールを出るが寝取られ男になったと思ひ込み困惑の表情となり、怒りの言葉を発して壁に向かって走ることによってエネルギーを使い、そして盗んだ金でワインを飲むことで不安や怒りを鎮めようとする。義父に対して第十場で感じる怒りは第十一場で不安と恐れに転化する。アルツェストに対する怒りや恐れは第十四場で、彼を揶揄し反抗することで、その吐け口を見い出す。

ところで第十五場においては、おやじのまだ残っているゾフィーに対する怒りの感情も、真犯人がわかって真犯人に爆発的に向けられる。

真犯人ゼラーの罪は他の者の集中攻撃にさらされると思いきや、アルツェストによる、みんなに罪があったという宣言を通して赦されることになる。罪ある者が他の罪ある者を罰することはよくないと考えられたからだ。赦す際アルツェストによって出された条件は、ゼラーが心を入れかえて礼儀正しくおとなしく誠実な人間になることである。事件はこうして一応めでたしめでたしの解決を得る。

しかしゾフィーとおやじがゼラーを赦したのは、この事件が世間に知れ宿屋商売に悪影響が及ぶようになっただけで困るからでもあり、ゾフィーの場合には更に新しく獲得した心理構造の維持のためにはゼラーが吊るされては困るからでもあろう。

しかしながら、おやじの前述のアルツェストにからかわれたという怒りと自分の社会における状況への不満、そしてアルツェストの不満、ゼラーのやりたいことがやれなくなることへの不満は根本的に解決してはいない。おやじが吐く残酷粗野な「こいつの頭に釘を打って車ひきの刑にせよ」(612行、613行)という言葉は、再び吐き出されないという保証はどこにもない。それにゼラーの社会観は根本的に変化しそうにもない。

Ⅲ. 登場人物と観客の関係

Ⅲ. 1. 笑いの提供者ゼラーに対して観客はどんな反応をするのであろうか。

ゼラーは第二場45行46行で、自分が金を盗むのに成功したのに対し、おやじがめあての手紙を捜しあぐねているのを知り泥棒と新聞の神は自分の方を愛しているんだと悦に入る。盗みは誉められたことではないはずなのに、ここではそれが美德でもあるかのような言い方がされている。してはいけないこととみなされている窃盗行為が、それがその中では負の価値とみなされている連関から解放され正の意味を帯びるのである。こういう場面に接したときの観客の反応は大きく分けると三つの場合が想定される。

その反応が笑いとなる場合をみてみると、笑いは更に二分されることがわかる。第一のタイプは盗みを肯定しないまでも、コチコチの道徳家に反感を持っていて、かかる道徳家がむきになって盗みを禁ずると、悪感情が強まる観客に見られる。彼らが笑うのは、盗みが市民道徳と同レベルの価値を付与されることによって、道徳家の価値が下落することから引き起こされるのである。この笑う人たちにおいては道徳家に対して通常敬意を払うことを外面的には余儀なくされているのではあるけれども、内面的には道徳家に対する嫉妬心あるいは軽蔑心が存在していて、しかもいつもそれが抑えられていたと考えられる。つまり抑圧された攻撃的志向が対象の価値下降によって解放され笑いに転化する⁽⁷⁾のである。

第二のタイプの笑いは次のようなものである。つまり舞台の上においては、成功した悪が成功しなかった悪を笑っているのであるから、道徳的価値体系を認めるものから見れば、第一場ではまだ、

少々いかれてはいるが普通の人間と大差がないと見なすことのできたゼラーが、ここに至ってもはやそういう普通の人間と見なすことが不可能になり、成功した悪である彼はゼロからマイナスへと価値低下を起し、そういう人間としてしか認められなくなる。別な言葉で言えば、やっぱり何て愚かなんだろうと彼らは思う。それで軽蔑の笑いがゼラーに向けられるのである。

このタイプに属する観客は、たとえ作者が市民階級に属するゼラーを通じて象徴的に、悪の目的を果たせなかった失敗した市民階級を笑い、かつ彼ゼラーに見られる愚かさを笑う意図を持っていたとしても、根本的に自分たちの階級を肯定する揺るぎない意識を持っているため、笑われる対象を自己の階級の象徴とは見ない傾向がある。従って笑われる者は階級構成員の変種か、十分に適応をしていない未熟者とみなされる。

笑う観客に対して、舞台に怒りをもって反応する観客もいる。怒る客というのは自分の失敗を見せつけられて腹を立てるタイプの客に見られるだろう。彼らは自分の行動規範が嘲笑されていると感じるのである。自分をも笑いの対象にしてしまうというユーモア感覚が彼らには欠如しているのである。より高い価値をもつ自分がより低い自分を笑うという芸当のできないのがこのタイプの観客なのである。

最後に無反応の観客である。自ら進んで喜劇を見に来る客を前提とした場合、無反応の客というのは厳密に言ったら存在しないだろう。刺激を受けとる器官に障害がない限り、刺激に対して何らかの反応をするのが人間なのだから。しかし、この場合、意味するところは、それとわかる感情を表に出さないということである。彼らは、ゼラーや宿屋のおやじと同じ体験をしたことがあるので、ゼラーやおやじを笑うことも怒ることもできないと思うのである。もし心の体制が柔軟であれば、苦笑となって笑いが漏れ出たかもしれない。苦笑となって漏れ出たという場合、その人はすでに笑う観客の仲間入りを果たしたということになる。

それではゼラーに注目してこの喜劇を見る人の思いをもう少し掘り下げてみよう。各人物のセリフのシラブル数の比は観客の聴覚を刺激する各人物のセリフの時間比とほぼ等しいと考えられるので、ここで、各人物の各場でのシラブル数の表を作ると次のようになる。

名 \ 場	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
Alcest	0	0	0	64	0	750	0	401	0	0	0	324	319	510	165
Wirt	0	185	0	0	0	0	628	549	400	107	0	0	0	0	83
Söllner	400	35	209	240	188	0	0	0	0	67	126	0	0	684	47
Sophie	0	0	339	452	0	0	372	0	0	0	0	0	211	0	36

ゼラーのシラブル数に注目すると、第十四場において、第一場以来最大のシラブル数となっている。

つまり、最も長く観客の耳に刺激を与える。そして第十四場では前場のシラブル数との差が最大となる。第十五場では落差が二番目に大きいのであるが、第十四場の場合とは落差の方向が逆である。つまり第十四場ではプラスであり、第十五場ではマイナスである。他の人物たちの場合には、ゼラーに見られる落差の最大の山と谷が最終段階にはない。九場以前である。ゼラーの場合のようなシラブル数の配分すなわち、観客刺激時間の配分は、ヴィルヘルム・ライヒの示した人間のオルガスム曲線によく似ている。従って、ライヒの曲線が快の曲線ともみなすことができることを考えると、ゼラーのセリフのシラブル数の変化は、われわれに快感を与えてくれるのではないかと仮定することができる。

またゼラーは全部で九つの場に登場し、四人のうち最高であって、二番目はアルツェストの七つの場への登場である。そしてこの喜劇において観客に向かって語りかけるのはほとんどゼラーである。しかもその内容は134行と135行「みなさんが下にいてくれて大変幸運です。/ですからそのうち彼らも恥じ入ることでしょう。」に見られるように、自分の立場を共有することを促すものとなっている。

以上に述べたように、快をもたらしてくれるであろうセリフのシラブル数の変遷、登場回数ของ多さもたらされる関心度の増大、観客への呼びかけによる、その視点のアピール度の増大によって、観客の中には、ゼラーの立場、視点を獲得あるいは受容するのに都合の良い状況が生まれるということが十分に考えられるだろう。

Ⅲ. 2. 一見、市民道徳派が勝利を占めているように見えるが本当はどうなのだろうか。

Ⅲ. 1. で暗示されていたことを、はっきりと言葉に表わしてみよう。つまり観客には大きく分けて、道徳をめぐって二派が存在するということである。それは道徳派と反道徳に片足を踏み入れた派である。

そしてこれまでの考察から知ることができたことは、アルツェスト、ゼラー、おやじの三人はついに構造化した不満を心の中において解消できなかったということである。ゾフィーの心的構造が他の三人に比べて比較的安定しているのも欲求の断念を前提にしているからであり、かつ市民道徳を精神の根幹にしているからである。「運命」の重みと「友人」と規定され、そしてその規定を受け入れたアルツェストの存在が、かろうじて危機を目に見えないよう覆って押さえてくれているからである。

この喜劇の市民社会の中において起こった事件は貴族アルツェストの采配により誰一人罰せられることなく解決される。道徳派の勝利が謳歌されているようにも見える。しかしアルツェストがゼラーを赦したのは、ゾフィーにならばやってもいいと思っていた金が盗まれたところに遠因がある。アルツェストは宿のおやじに犯人は娘だと言われて、それじゃゾフィーに金はやってもいいし盗難はなかったことにしてもよいと決意する。しかし実は犯人は彼女ではなかった。ゼラーだった。もしゼラーを罰してしまえば、ゾフィーを悲しませるようなことにやはりなるだろう。そんなことはしてはいけない、とアルツェストは考えた想定できる。それにゾフィーを誘惑しようとしたアルツェストにも罪

はある。彼女の夫を赦そうという結論に彼は達する。美德を信じず(210行)友情・愛情・愛情のこまやかさ、誠実さを悪徳の仮装したものとみなしていた(189行)し、今も友情を否定している(206行)片足つっこんだ反道徳派たる彼がゼラーに美德を身につけるように言うのは、ゾフィーの魅力にまいていて、彼女を悲しませたくないと思っているが故である。確かに形式的に、ゾフィーは勝利している。道徳派たる観客は安心する。めでたしめでたし。

しかし一番痛めつけられたはずの片足つっこんだ反道徳派たるゼラーが言葉の爆弾を、笑っている観客の口の中へ投げ込むのである。「間男されて吊るされるんじゃ、ひどすぎまさあ」(632行)―これは美德とやらが彼に対して持っている意味を示している。つまりゼラーはアルツェストやおやじが示してくれたと思われる寛容やゾフィーが示してくれた寛容と貞節が自分を苦しみや恐怖から救い出してくれた点において美德を讃える。しかし彼自身の価値観によって作りあげられている貸借関係的体系から導き出せない事態が生じれば、美德は後景に退かされてしまう。すなわち寝取られ男となったのだから寝取った男の金を盗んでも当然だと考えるのである。この彼にとって当然のことが、当然でない人がいて、その人によって女房を寝取られ、しかも吊るされるということになると、彼の貸借関係的体系に照らしあわせて「吊るされる」という分だけ貸しとなる。もし貸しを残して死ぬかもしれない事態が生じれば、自分は美德が要求する社会的責任感情には従わないぞというホンネが前述のセリフにはこめられていることになるのである。

こうして大勢は逆転する。こういう解釈を支える証拠となる箇所を作中から引用してみよう。

第565行。Alcest herausbrechend : !

Herr Söller !

Söller

Soll er was ?

Alcest zurückhaltend : !

Ich sag ihm ; sey er still.

礼を失していると思われるゼラーを黙らせようというアルツェストの Herr Söller ! という言葉に対し、その言葉を投げつけられた当人は「彼にどうしろっていうんです。」と聞き直っている。ここで注目しなければならないのは Söller という固有名詞が Soll er あるいは Soll er と分解できるのだということである。Söller という非難の籠った言葉を受けて Soll er と受けるゼラーの機知は観客に笑いをもたらし、従ってそれを観客の心に焼き付けることだろう。観客は素早く Söller という名前の暗示するものを嗅ぎつけるだろう。すなわち作中のゼラーの機能を観客に伝える作者のアピールと解することだろう。ゲーテはこう言っているのである。わたしはこのゼラーという男に何かどえらいことをさせるのですよ。自分の思いをこめているんだからゼラーの言うことに注目して下さい、と。

Ⅳ. ゲーテの思いが現代に向けて放つ言葉—弾丸 Wortkugelの射程距離

Ⅳ. 1. 若きゲーテの精神が登場人物たちの中に反映されていると見るとどうなるだろうか。

ケートヒェンと別れフランクフルトに帰ってきたということ。そしてこの第二次フランクフルト時代のゲーテは第一次フランクフルト時代に比べたら比較にならない程世の中を体験した人間として家族と向かいあったということ。それらのことが「同罪者たち」を書いている彼の生活の前提となっているということを否定しきることはできないであろう⁽⁹⁾。従って「同罪者たち」に、これらの前提の反映を見ることは、全くの的はずれと批判することは困難だろう。

アルツェストには八十ターラーを盗まれても絶望的にうろたえなくてもよだけの強力な財産の基盤がある。彼は領地を持ち、小作料を納めてくれる小作人を持っている。市民階級の娘と仮に結婚しようと思うなら、自らの決定によってそれができる立場にある。こういう決定の可能性について見ればアルツェストは当時のゲーテに比べて、こと結婚、財産処分の点でははるかに有利な立場にあったといえよう。ゲーテは父の庇護を受けていたために常にその意向を考慮し自分の願望との葛藤に悩まなければならなかった。

ところでゼラーについて見ると、ゾフィーという緩衝帯のおかげで家を顧みずに遊び歩いても生きていける立場にあった。だからたとえ彼が自分にうしろめたさを感じたとしても法に触れない程度のことであれば、羽をのばしても許されるということを知っていた。ゲーテの場合にもほぼ同様のことが言える。つまり酒を飲み法学の講義を受けず恋に身を任せて、失恋し職業のための学業において成果をあげずに、体を壊しても廃嫡にされるということはなかった。両親は自分を見棄てることはあるまい、妹や母が父と自分の間に立って、圧力、緊張を和らげてくれるだろうと期待することができた。

以上のことにより以下のことが仮定されるだろう。アルツェストがゲーテの表向きなりたかった姿だとすればゼラーは現実の彼に近い、いわばホンネの部分を反映しているだろうということ。

ところでゲーテはライブニッツの啓蒙主義的最善の世界というのには疑問を持っていた⁽¹⁰⁾。なぜなら、グレートヒェン事件に見られるように正しい自分は、不当にも彼女を奪われたのではないか、という思いを抱いていたからである。この喜劇中にも564行で「しかもおふくろのおなかの中でもう寝取られ男の角をつけられていたのでございますよ」と言うのはゲーテのホンネを受け持つゼラーである。ゲーテには最善の世界とやらは最善のことをしてくれないという怒りの気持があったと思われる。この我慢がならないと思う気持は、人間にひどい仕打ちをしない世界とはどのような条件を持った世界であろうかという問いをゲーテに抱かせるきっかけになったと思われる。つまり善が行なわれるためには、どのような条件の下に人間は住まなくてはならないかという問いである。

全く利己的に考えれば、それはアルツェストのような貴族にでもなって自らのことを決定できる立場へと自分を持っていくことである。しかし貴族であれば、貴族であったでゾフィー（つまり実際の

生活においてはケートヒェン)と結びつくのは不可能だろうと考える。その状態は作品中のアルツェストのように欲求不満の中に生きていかねばならないことを意味している。もし貴族なら、政治に携わっているから土地と城から追われることだってなきにしもあらずである。ゲーテは考える。ゼラーの欲求だって宿のおやじの欲求だって、この世界では充足されないと。ゼラーのように、そして父親のように、そしてそれからアルツェストのように求めるものが得られないことによる渴きにあえいでいる人たちとは違って、比較的安定しているゾフィーにしても、欲求を断念させられている。すなわち前記の問いに対してゲーテは、貴族であれ、宿屋の主人であれ、ゼラーやゾフィーの立場であれ、欲求がある限り善を行なうことは難しいだろうという答を出しているのである。そして身分を越えることのできない社会は欲求の断念を強いずにはおかないだろうということを暗示してもいる。

さて心の思う働きつまり思う働き全体である精神⁽¹¹⁾に関して、ゲーテの場合、それがこの作品の中に反映されていると仮定すると、例えば彼のホンネを受け持っていると考えられるゼラーが決して市民道徳に屈服しておらず心を入れかえるつもりもないところから導き出せる結論は次のようなものとなるだろう。

欲求の断念は身分社会が強制しているとはいえ、欲求を断念してしまわずとも身分社会に生きていく方法はある。それは道徳と反道徳の両方に足をおくことである。互いに寛容な人間がつくり出している小社会あるいは小グループにおいては、たとえ身分社会に生きていても、断念せずとも生きていける。

Ⅳ. 2. 登場人物全員に罪ありとする考えは何をもたらすのであろうか。

この作品では全ての人物に罪がある。もちろん事件に関与したものの誰ひとりとして罪を免れないし、そのうちの誰かが最も重い罪を犯し、それが暴露されてしまった人に「石を投げ」つけることはできないという考えは、キリスト教的であり、別に新しいものではないとも言えるだろう。しかしキリスト教的と断定してしまうことのできない決定的な理由がある。登場人物たちは神に対して赦しを請うていないし、自分らのことは自分らの手で解決しようという点で宗教とは手を切っているのである。そしてきわめて市民的な人物たち、はみだした人物、そして貴族の全登場人物に罪ありと宣告することは、彼らの依って立っている基盤の根本的見直しを宣言することへとつながる可能性を秘めている。以上のことがキリスト教的と断定することを避けさせる理由となっているのである。

依って立つ地盤の根本的見直しと言うと1968年に全世界を揺るがした学生反乱を思い起こさせる。奇しくも若きゲーテが「同罪者たち」を書き始めた年の二百年後にあたるのである。

V. 最 後 に

この作品の中でアルツェストはゾフィーとの結合は断念していても彼自身の愛情観・道徳観を捨ててはいない。宿の主人も政治情報蒐集への関心を放棄していない。ゼラーにいたっては反道徳的爆弾を客の口の中へ投げ込んでいる。作者は革命的ヴィジョンは、はっきり打ち出していない。しかし政治的だ。

註

- (1) „Der junge Goethe Bd.1“ hrsg. von Hanna Fischer-Lamberg, Walter de Gruyter & Co, Berlin, 1963.
- (2) „Oden an meinen Freund“ (a. a. O. S. 189 – 192) 特に第二オーデを参照。
- (3) Richard Friedenthal: „Goethe – Sein Leben und seine Zeit Band 1“ Deutscher Taschenbuch Verlag, München, 1968.
- (4) „Goethes Werke 4“ Hamburger Ausgabe 1953, S. 28 – 72.
- (5) „Der junge Goethe Bd. 1“ S. 324.
- (6) 初稿 65行、66行「あの人がはじめて燃えたさせたこの心、 / あの人を通してはじめて愛は何かと感じとったこの心。」によってアルツェストの自分に対して持っていた意味を告白している。また84行では「わたしはあの人を待ち望んでいるのに恐れてもいる」と言っている。これはゾフィーの憧れとそれがひょっとしたら消えてしまうかもしれないという恐れの気持を表わしている。つまり憧れる気持は消えないで残っているわけである。
- (7) 笑いの価値理論については梅原猛「笑いの構造」(角川選書1974年)を参照。
- (8) 217行 — 219行「わたしは彼女には金がないということを知っている。 / でも彼女はわたしには打ち明けない。わたしが好きなのはそういうところだ。 / わたしは今、ひそかに贈ってやろうと思っている。」
- (9) dtv-Kindlers Literatur-LexikonのDie Mitschuldigenの項には「Schäferspielのように『同罪者たち』も、この作品の中においては直接体験とは大きな距離をとって描かれているが、若きゲーテの個人体験にもとづいているのである」と書かれている。Wolfgang Kayserは„Goethes Werke 4“のAnmerkungen 472頁で「この作品の全登場人物……彼らは詩人と精神的な関係は何ら持たない役をおびて出ている。そしてこの作品の状況、争いそして事件も同様に若きゲーテの人生問題からの反響ととらえられそうにない。」と書いていることを踏まえている。
- (10) 16才時の詩 „Dieses ist das Bild der Welt“ (Johann Wolfgang Goethe

„ Satiren, Farcen und Hanswurstiaden “ Herausgegeben von Martin Stern,
Philipp Reclam Jun. Stuttgart, 1968, S. 5) を参照。

(11) 茅野良男 「認識論入門」 (講談社現代新書1976年) 参照。

(岩手大学非常勤講師)